

平成31年度 日本／ユネスコ パートナーシップ事業
近畿・北陸地域 ASPnet 校(小中高)による
日中 ESD／SDGs学びあい交流会&臨場研修会

— 記録ならびに報告 —

運営機関 大阪・関西ユネスコスクール (ASPnet) ネットワーク
事務局長 治部浩三
受託大学 大阪府立大学(人間社会システム科学研究科)
伊井直比呂

1. はじめに

大阪・関西ユネスコスクール(ASPnet)ネットワークならびに大阪府立大学は、2009年に現在のネットワーク組織(母体は2003年創設)が設立されて以来、微力ながらも国際的なASPnetの役割を担うべく、活動の方法的課題および内容的課題に向き合ってきました。これに際しては、ただ異なる国や地域の学校が集まることを目的とするのではなく、何をどのように「学びあう(Mutual Learning)」のかの「問い」を、先駆的な国際的協同実践であるBSP(Baltic Sea Project 起源1989年)から2007年に共有させていただき、大阪ASPnetもその方途に力を注いで参りました。

今次の事業は、大阪ASPnet創設期の第1世代のスクールコーディネーターの多くが引退し、この「問い」を引き継いだ若手の教員が担った最初の事業として位置づけられます。ESDやSDGsは単なる「運動」やトピック的な「学習活動」ではなく、国や民族を超えた人間一人ひとりの存在のあり方を、教育を通じて問い直していく基盤として、その歴史的潮流の中で関わってきた教員が既存の方法論的財産を継承しつつ新しい感覚で担ったものです。

2. ユネスコスクール近畿・北陸ブロック大会の構成およびコンセプト

本事業は、以下のI～IV段階のステップで構成され、下記の経緯ならびにコンセプトで実施されました。

- I. 学びあい交流会のための「準備セミナー」(3回計3日)、
- II. ESD/SDGs学びあい交流会(1泊2日)、
- III. フォローアップセミナー(1日)、
- IV. 未来展開会議・評価会(2回)

この事業は、ユネスコスクールの教員・児童生徒間の交流促進や好事例・知見の共有などを目的として創設された文部科学省のユネスコパートナーシップ委託事業として計画されたものです。

これを受け、大阪府立大学が2019年3月に本件委託事業を受託し、大阪ユネスコスクールネットワークと共に計画し実施したものです。事業内容は、「近畿・北陸地域ASPnet校(小中高)による日中ESD／SDGs学びあい交流会&臨場研修会」を行うもので、近畿・北陸地域のユネスコスクールの児童生徒および教員が「学びあう」場として計画されました。

その特徴は、異なる学校や学年、そして異なる地域や国の小・中・高・大学生・教員が、それぞれに付随する各属性の境界を超えて行うESD・SDGsのネットワーク型の学びあい交流会の形態(以下ワークショップ)にあります。それは、既存の価値に依拠する序列化された優位性を誇る場とは座標軸を異にするものです。むしろ、この形態はASPnetとしてUNESCOの理念に準ずる高度な対等性に基づく場であり、ESDの基本的考え方に本来的に合致している学習の場と言えます。そもそも、何人たりとも「序列化されたESD」の中には位置しません。このように、私たちは国際的な「普

遍」に向かう価値と知を追求する「協働実践」を可能にする広域ネットワークを最終的に目指したいと考えています。しかし、その基盤には直接的に児童生徒や教員が何を学びあい、何を協同してどのような知を得ることができるか、という教育活動の「質」を共に高めあうことの大前提があり、また、その中には、ASPnet 各校が「加盟」をしたからこそ得ることができる ESD の学習効果や世界の中の役割観など、児童生徒や教員自身が未来に向けた革新的な教育に出会うことの喜びが得られるものでなくてはなりません。そして、これらを大切にしつつ、次世代のネットワークは市民、NPO、地域諸団体、大学、企業、教育行政ほか公共団体等が連携して、多様な当事者による実践的・研究的な発展型の ESD を、多面的方法をもって共創できるような形態になればと願っているところです。このような意味で、今次の事業は将来にわたるネットワークへの展開、また総合的に GAP 原則 5（学びの権利性、質の高い教育、他）に基づく児童生徒の成長および優先行動分野である教員の実践力向上、さらに将来のユネスコスクールの地域ネットワークのリーダーづくりに貢献する機会になることを期待して計画されたものです。本事業の後半には、ネットワークの構築方法や運営の仕方などの知見を共有し、各地域の核となるユネスコスクール間の連携が長期的に可能となるフォローアップも計画に入れ、今次の成果を地域や大学など異なる分野とも共有して発展させることができる会議を開催いたしました。これらはユネスコスクールの活動のみならず、上述の多面的協働による SDGs 目標群の達成にも寄与する基点になるものと考えています。

次に、上記コンセプトの I～IV 各ステップへの導入は、次のように統合されます。

I. 日ごろより、ASPnet 校として取り組む ESD の身近な課題や地域の課題への活動、さらに ESD を起点とする SDGs への取り組みについて、近畿・北陸地域の ASPnet 校の児童生徒が集まり、参加校が相互に「プレゼンテーション」を行う。（誰もが教え・学ぶ存在）

→ 異なる持続可能性の諸相を交換（異なる立場の発見）

I. プレゼンにより、異なる課題や共通する課題（あるいは同根性）について学びあい、それらを基にして自己のあり方を問い直し、既存の実践や学校での取り組みの質を向上させるディスカッションやダンス表現活動。（誰もが発見し・発展する存在）

→ 諸相を通して、人や社会に共通する同根課題と「地域と世代」の個別課題を考察と発表

II. さらにこの話し合いの成果を基に、実際の持続可能性を考える「ESD 実践拠点」（姫路市安富町）において、現実社会・自然・人の中で直接的にそれらに関係づけて持続可能性を学ぶワークショップを実施。これにより、学校教育にとどまることなく継続的に考察可能な学びと実践の座標軸を獲得する。

→ 概念のリアル化と試行・広がり・深まりを通じた問い直し

III.IV. 実施期間を通じた振り返りを行い、学びや知見の内面化を図る。このため児童生徒の約束（宣言）を作成し、今後の自らのあり方と学び方などを内面化する。学校での取り組み「強化」。

→ 人と人、人と社会、人と自然における学びと経験の総合化を図る。また自己の可能性の再構成を行う。

I～III. 今次は、大阪・関西ユネスコスクールネットワークが継続的に交流をしている中国の ASPnet 校（中国人民大学附属学校）の小中高校生も加わり国際的な ESD の協働性を参加各校にも広めることを行う。

→ 同じプロセスで学習してきた中国からの参加校による成果①②③④を交換。

【期間計画日程】

（調整準備期）2019年6月10日（月）～2019年8月17日（土）・・・I II

（本番実施期）2019年8月21日（水）・8月22日（木）・・・II III

（フォローアップ期）2019年9月20日（金）～2020年1月31日（金）・・・IV

3. 記録ならびに報告

| | |
|--|-------|
| 2019年4月～8月 準備期間 | (3頁) |
| 2019年7月14日(日) 第1回準備セミナー ASPnet 基礎 ・ ESD 基礎 | (4頁) |
| 2019年7月21日(日) 第2回準備セミナー 人と人、人と自然の問題を考える | (6頁) |
| 2019年8月17日(土) 第3回準備セミナー 人と社会を考える／はじけるダンスで表現 | (8頁) |
| 2019年8月21日(水)～22日(木)〈1泊〉 安富北小学校での学びあいワークショップ | (10頁) |
| 2019年11月4日(日) フォローアップセミナー | (15頁) |

| 実施時期 | 実施事項 | 概要 |
|--|---|--|
| 2019年 4月7日(日) | 実施会場の下見・打ち合わせ (全3回実施) 姫路市立安富北小学校、鹿が壺グリーンステーション〈宿泊施設〉、伊沢の里〈宿泊施設〉、病院等下見 | 準備 |
| 2019年 4月27日(土) 会場：大阪府立大学 I-site なんば | 「大阪・関西ユネスコスクールネットワーク」 コーディネーター会議  (ASPnet 校 School Coordinator による企画会議) 「近畿・北陸地域 ASPnet 校 (小中高) による日中 ESD/SDGs 学びあい交流会」について事務局より企画の具体的展開について提案を行い、検討を行った。 | (第1回会議) 小中高校代表のスクールコーディネーター教員による会議 特徴： ASPnet/ESD に即した「平等・公正」を基本とした運営 |
| 2019年 5月12日(日) 会場：大阪府立大学 I-site なんば | コーディネーター会議および協働作業  各校の School Coordinator による企画会議及び協働準備作業風景。初めて参加した学校や教員と共に、ESD の知識的理解だけでなく、協同 (ASPnet) と協働 (ESD) を意識した具体的な準備作業を行う。教員間のネットワークにとって重要なプロセスとなった。 | (第2回会議) 北陸・近畿地域の全 ASPnet 校への「案内」発送準備風景 特徴：ASPnet 原理を意識した教員間の協働実践および ESD を意識した相互の学びあい実践 |
| 2019年 5月15日(水) | 姫路市環境政策室室長 (津田室長) と打ち合わせ | |
| 2019年 6月4日(火) | 富山国際大学附属高校と打ち合わせ (富山県の ASPnet 連絡協議会の事務局) を訪問 同校にて事業の概要説明、「富山県 ASPnet 校」への参加案内を行った。また、地域間連携に関する懇談会 | 特徴：ネットワーク「拡大」(富山県の ASPnet 校との連携) |

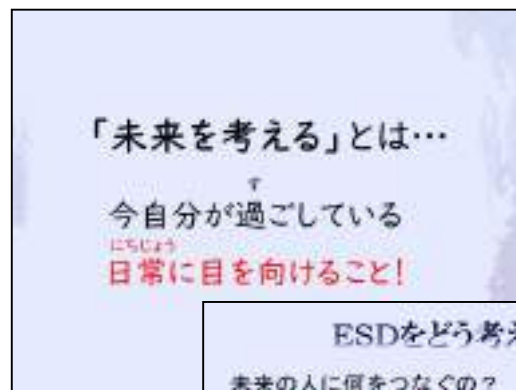
| | | |
|--|---|--|
| | を開催し、富山市内の ASPnet 校の連絡協議会との連携が提案された。 | |
| <p>2019 年 6 月 8 日 (土)</p> <p>会場：大阪府立北淀高等学校 (視聴覚室)</p> | <p>総会開催</p>  <p>代表校：大阪府立北淀高等学校にて「大阪・関西ユネスコスクールネットワーク」総会を開催。総会で同事業の実施計画詳細を確認・承認。ここで和歌山県、兵庫県の初参加の学校に「近畿・北陸地域 ASPnet 校による日中 ESD/SDGs 学びあい交流会」を説明。参加を案内した。</p> | <p>特徴： ネットワーク「拡大」(和歌山県・兵庫県姫路市・兵庫県神戸市の ASPnet 校との連携打ち合わせ)</p> <p>左写真は加盟校の総会風景 (大阪府立北淀高等学校：ネットワーク代表：無津呂弘之校長)</p> |
| <p>2019 年 7 月 14 日 (日)</p> <p>第 1 回準備セミナー開催</p> <p>会場：大阪府立大学 I-site なんば</p> | <p>「近畿・北陸地域 ASPnet 校(小中高)による日中 ESD/SDGs 学びあい交流会」</p> <p>1. 第 1 回準備セミナー・開会式</p>  <p>大阪・関西地域の小中高等学校 ASPnet 加盟校、申請校、申請準備校が集まりプログラムが開始された。大阪・関西ユネスコスクールネットワーク代表の大阪府立北淀・淀川清流高等学校校長(無津呂弘之氏)からの開会の挨拶および目標や活動内容について案内が行われた。</p> <p>2. 参加校の学校紹介プレゼン&参加者紹介</p> <p>参加各学校からの学校紹介プレゼンを行い、①自分の学校を再発見 ②これまで未知だった地域・他の学校の良さを発見する(国際理解や地域理解、そして他者理解の基本)ことがおこなわれた。これにより学校間連携が開始された。</p> | <p>特徴：ネットワーク活動の「深化」</p> <p>第 1 回準備セミナー項目</p> <p>①学びあう仲間を知る</p> <p>②ESD 基礎 (支え合い・つながり合い・深め合い続ける：協働する力)を理解する</p> <p>③ESD 基礎をもとに学校間の連携を共感的理解</p> <p>④他校の児童生徒と ESD の考え方を実践的に理解する</p> <p>⑤公正と平等</p> <p>⑥人として大切なことを考える</p> |



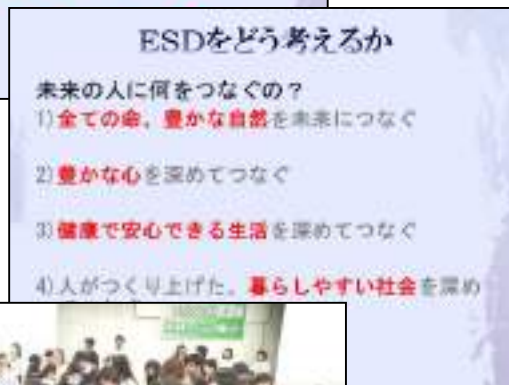
左写真は、学校紹介プレゼン風景。

3. ESD を理解する

最初に、このプログラムの基盤と目標、そして学校間連携を成り立たせる考え方は UNESCO と ESD の中にあること。そして ESD の知識を ESD の実践を伴って、さらに ESD の価値を学びながら運営されることの説明を行い、これをワークショップで学んだ。



左は当日使用したスライド。



左写真より ASPnet / ESD の考え方を学ぶことができるアイズブレイク

■写真は「相子じゃんけん」の様子。ASPnet の考え方と ESD の考え方が体感できる有名なゲーム。2003 年から導入されている有名なワーク。



左写真より (実践例)「50 年、100 年先のことを考えるためには、10 分後にこの部屋を使う人や、出会う人のことを考えた過ごし方」を意識化する。

■持続可能な社会を考えるために、「10 分後のことを考える」講義風景。スモールステップにより小中学生全員が「わ

かる」時間を設けながら進行。これにより教育での公正や協力〈SDGs 目標 4〉の意味を学ぶ。

4. ファミリーワーク(身近な ESD,意見交換)

持続可能な社会は、ある特定の人々の社会ではなく、様々な生活や事情、そして背景をもった人すべてに対して恩恵がある社会でなければならない。このために敢えて異なる学年や学校、校種の児童生徒が一つのファミリーを形成して考えを交換する。(自分から発する言葉〈主体性〉をとりわけ大切にする)



■異学年、異校種の児童生徒が一つのファミリーを形成して「自分」が感じた、考えた ESD の「考え」を交換する風景。持続可能性の諸相や考察基点となる価値の多様性およびその背景を知る。

左写真より
ファミリーワークで、自らの経験と考えを交換している場面

5. 振り返り

すべての参加者の考えから学び、よかったこと、次回に心がけたいこと、助けてほしいことを共有する時間。これにより、共感性と個々の貴重な考えを意識化。



■小学生から「一日の学びの成果」発表

左写真より
小学生の振り返りの発言風景(自ら挙手：写真中央)

| | | |
|--|--|--|
| <p>2019 年 7 月 16 日 (火) 拡大事務局会議</p> | <p>拡大事務局会議 第 1 回準備セミナーの課題抽出と次回展開の内容修正を行った。</p> | |
| <p>2019 年 7 月 21 日 (日) 第 2 回準備セミナー開催 会場:大阪府立住吉高等学校(北畠会館)</p> | <p>第 2 回準備セミナー開催 (遠隔地の ASPnet 校のために YouTube 配信) 第 2 回準備セミナーは、一般的な理解や体験的理解から開始された第 1 回準備セミナーの内容の復習と学びの成果を確認して開始された。続いて、第 2 回では、具体的に持続可能性が失われつつある地域(姫路市安富町関地区)で、失われつつある村の歴史や文化、そしてかつての人々の営みを残すために、活動をされている方(岡上正人氏)の活動を学んだ。</p> | |

1. ESD の復習と続きの学び

第1回準備セミナーの復習と学びの確認を行った。第2回目からの参加者が疎外感を覚えないよう、初参加の児童生徒の紹介や丁寧な復習を行い、かつ2回目からの参加者もファミリーに参加可能な内容の展開が考えられた。これは ESD.SDGs の考え方に沿って実施したものである。



(座学：ESD をどう考えるか、前回の続き)

2. 持続可能性を考える：「奥播磨かかしの里再生への取り組み」(岡上正人氏) から



(過疎の町の活性化について講演：岡上正人氏)

■ 生徒の記録：学んだことは、かかし作りをしたこと的情熱。自分のふるさとを自分達の手で村おこしをしたから。そしてちゃんと効果がある。さらに、新しいことへ挑戦しているから。(中学生)



■ 生徒のノート。
全てが学びとして記録されている。「大切にしたいこと」は、課題から目をそむけず、全員で向き合おうとする姿勢。交流をかさねることで、会話を楽しくするようにまでなる、と自分の未来像を記している。(高校生)

特徴：持続可能な開発視点でみる地域とは。地域創造と市民の役割。

特徴：
①問題発見を行動につなげるには
②課題発見力
③課題解決力
④成長感



左写真
グループアクティ
ビティーの様子

ESD が児童生徒自らの「成長」と重なることで「学ぶことが楽しい」と思えることが教員に理解される。

3. 身近な地域の課題を共有する



(協働による ESD プレゼンづくり:プレゼンチーム)

4. 教員ミーティング開催

2019 年 8 月 17 日
(土)

第 3 回準備セミナー 開催

会場:大阪府立大学
I-site なんば

第 3 回準備セミナー 開催

([遠隔地の ASPnet 校のために YouTube 配信](#))

1.【ESD カリキュラムの確認】 前回の振り返り



■ 全体カリキュラムの確認と、参加者の学びの成果とこれからの提示。

2.【課題解決ディスカッション】

前回出合った持続可能社会を阻害する身近な課題や、新しく発見した課題から、その共通課題や同じ問題の根(同根)を探す。



(臨場研修)

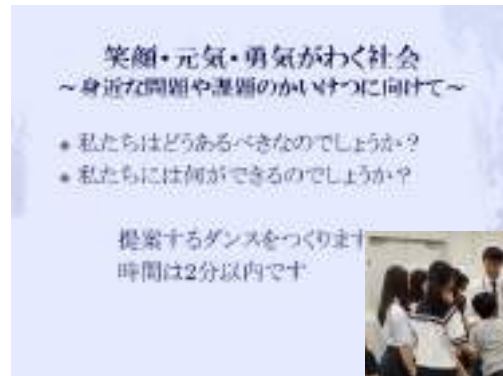
一過性のプログラムではなく、生徒の ESD/SDGs の考え方が育つカリキュラムを改めて提示。(スライドはその一部)

(臨場研修)

ディスカッション風景を見てアクティブラーニングを強調することなく、自らの経験や考えを共有し、新たな知を形成しているプロセスを見る。

3.【ESD 創作ダンス制作】

ディスカッションを受けて、まとめた課題等の成果を自分たちの意識の中に留めるだけでなく、私たちが考える持続可能社会へ向けての発信として「考え」を「創作ダンス」で表現する。この活動は、共感を共有できる大きな効果がある。



写真より
ダンスを練習している風景

【児童・生徒が発表した創作ダンスのテーマ内容】

- 発表①：だれもが、自分が原因になっているかもしれない。でも、そのことをだれもが気づくことができる。コミュニケーションをとってよい社会にしよう。
- 発表②：お互いがお互いに気にしあう（無関心にならない）社会になればよい。
- 発表③：対立を対立のままにして終わらず、分かり合える社会にしたい。
- 発表④：足もとしか見ていないから、みんなの後をついて行って、結果、事故にあってしまう。時間を巻き戻して、やり直すことはできない。これは社会で起こっていること。歴史の中に同じことがあったはず。



ディスカッション
成果：ESD ダンス
発表内容。
特徴：
個人的な心がけの
グループ。社会的な
在り方を描いたグ
ループがある。

左写真
ESD 創作ダンスの
発表風景

- 発表⑤：一つ一つの身近な実践が大切。電車の中での譲り合い。ゴミのポイ捨てをやめる。これをすればよい街・きれいな山・海になる。（マイクロプラスチックにも対応）
- 発表⑥：歩きスマホをしながらの自転車に乗るのをやめよう。ドライバーも同じ。安全な街づくり。
- 発表⑦：知らない人にも挨拶を。挨拶をすることは温

（臨場研修）
教員はこれら発表
に臨場することで
ESD の表現方法や
児童生徒がどのよ
うな発想をするの
かを理解した。
特に、大人とは異な
る社会的な視点を

| | | |
|--|---|---|
| | <p>かい社会をつくる上でとても大切なこと。(何のために挨拶をするのか、という社会的意味を考えている。挨拶は平和の第一歩)</p> <p>発表⑧：信号を守る。自分が守ることで守っていない人へのメッセージとなる。自分から示す「信頼できる社会」づくり。「みんなも〇〇してない」ということではなく、自分は社会の中でどう生きるかを示そう)</p> <p>発表⑨：自分のことのみで専念しないことと、AI などによって「監視社会」にならないような方法を考えよう。</p> | <p>持つ場合があり、これらが教員の実践力の幅を広げることになる。</p> <p>左写真 大学生による「誰一人取り残さない」をテーマにした手話コーラス発表</p> |
| <p>2019年 8月21日(水) 「学びあい交流会」 1日目 会場：姫路市立安富北小学校／鹿が壺グリーンステーション</p> | <p>安富北学校における「学びあい交流会」(1日目)</p> <p>■ 次の学校が参加して、異なる学校、異なる学年、異なる地域、異なる国の児童生徒がそれぞれの視点から学びを行い、それらと交換してこれまでのESDの考え方を大きく広げる活動を行った。 (学びあい交流会参加校) 中国人民大学附属小学校・中学・高校／富山県富山国際大学附属高校／兵庫県姫路市立安富北小学校／兵庫県立川西明峰高校／神戸大学附属中等教育学校／京田辺シュタイナー学校／奈良県奈良教育大学附属中学校／奈良育英中・高校／奈良県立法隆寺国際高校／大阪府アサンプション国際小学校／大阪市立晴明が丘小学校／帝塚山学院中・高校／大阪府立富田林中・高校／大阪成蹊女子高校／大阪府立北淀高校／大阪府立住吉高校／大阪府立松原高校／大阪府立長野高校／大阪府立豊中高校能勢分校／大阪教育大学附属高校池田校舎(教員・児童生徒等153名が参加)</p> | <p>参加校：別冊報告書48頁参照</p> |
| <p>1日目午後～</p> | <p>1日目のプログラムは次の通りで実施された。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 歓迎会 2. ESDプレゼン発表と学びあい 3. かかしの里での暮らしの発見 <p>1. 歓迎会 安富北小学校児童による歓迎太鼓</p> | <p>別冊報告書5頁</p> |



■ 全校生徒 35 人の児童に迎えられ、代表児童による太鼓の演奏が行われた。

中国人民大学附属中学（児童生徒）歓迎



■ 中国人民大学附属中学（中等教育学校）は、毎年「大阪ユネスコスクールネットワーク」との交流に参加してきた。今年も 8 名（内教員 2 名）が参加して国際的な ESD の広がり と 連帯を確認した。

（臨場研修）

初めて参加した教員は中国においても学校教育で等しく持続可能性について学んでいることを知った。

ESD が国際的な教育活動であることの認識を持つと同時に、地域や国ごとの問題に注視するだけでなく国と国を貫く同根的課題があることを知る。

2. ESD プレゼン発表と学びあい



■ 発表は、富山国際大学附属高等学校、大阪ユネスコスクール加盟校合同発表、奈良教育大学附属中学、姫路市立安富北小学校、中国人民大学附属小学校・中・高等学校（合計 8 発表）

（臨場研修）

これまで ESD の実践を実施していなかった教員は各学校の取り組みだけでなくユネスコスクールとしての一つの責任として実践する必要性を知る。

発表スライドは別冊報告書 30 頁～

1 日目夕方～

■ ESD プレゼンの発表後にわかったことや学んだことを共有し、記録を行った。

（臨場研修）

教員は、児童生徒が異なる学年、初対面関係なく様々な感想や意見を聞き、自分の考えも聞いてもらえることの経験をしている。この様子を知る。

これら経験が学ぶ意欲を高める様子を見る。また、異な



3. かかしの里での暮らしの発見



る学年や他の学校の生徒との学びあいの成立に対する成果が確認される。

左写真
かかしの里への出発風景

■ 教員振り返りより（例）

- ・ 初めて会う安富北小の児童と優しく接し、協働して課題に取り組んでいました。初対面の人に対する壁がなく、素直に受け入れられることができるものだと感じました。様々なアイデアをまとめ学びを深めていたと思います。（男性）
- ・ 他者を認め温かく受け入れられる子どもたちの素直な心に感動しました。素晴らしい能力であり大きな可能性を感じました。人づきあいが苦手な私ですが子どもたちのような素直な心をもって臨みたいと思いました。（男性）
- ・ 他校との交流によって、生徒が普段の学校生活では見せない一面を見せたり、普段口にしないような意見を言ったりしました。交流の機会や異文化と触れることの大切さを再認識しました。（女性）
- ・ 地域とのかかわり方、希望をもって地域再生をしていくやり方などを学ばせていただきました（女性）
- ・ ファミリーの友人どうして話ができるようになっていたりしたところがとても嬉しかったです。あと小学生は凄いですね！（女性）
- ・ 高校生が小学生の手をつないで山を下っていたり、いっしょにごはんを食べるとき、気遣っていたりする様子は見ていてとてもうれしかったです。まとめも短い時間の中で、ワークショップの成果か、どのファミリーもきちんとまとめられていて、そんな力がついたのだなあと思いました。それぞれのワークに時間がかけられていないので、地域の課題の解決を自分たちの課題解決にどう落としこめたかは少し疑問も残りますが、異年齢・異文化の中での協働や学びあいが見られました。（女性）
- ・ 日本の生徒たちが素直で積極的に学ぼうという姿勢が印象的でした。プレゼンの発表や、中国の生徒と向き合っている場合は、みんな興味をもって真剣に相手の話を聞いたり、各ポスターの制作や発表、自然観察のワークの場合で、小学生から高校生まで協力しながら参加したりして、本当に素晴らしかったです。また、素直に自分の気持ちを表すことに大変よかったですと思います。例えばカレーを食べて「美味しい」とか、違うことを好奇心をもって理解しようとか、相手のことを褒めて「すごい、すごい」といつも温かく反応して、和やかな表情で人と人の関係を柔らかくできました。（中国・男性）

上記の児童生徒の学びは、彼らの振る舞いや変容となり、教員の「振り返り」の記述の中にも記録されている。

2019年

8月22日(木)

「学びあい交流会」

2日目

2日目のプログラムは次の通りで実施された。

1. 生きもの探索ワーク
2. 学んだことポスターセッション

1. 生きもの探索ワーク



■ ご指導：兵庫県立大学・姫路市科学館などの専門家の方々
森田俊司先生、稲田和久先生、相坂耕作先生、山田八穂先生、平山吉澄先生、内藤親彦先生
全参加者が5コースの中から希望するコース参加して朝のすがすがしい森の中で観察を行った。
(昆虫コース、きのこコース、水生生物コース、植物コース、鳥類コース)



■ 生徒は、自然の中に入ることを「自然に触れる」と表現する。しかし、この自然探索ワークは、専門家の話を聞くことで、水の流れと水生植生や水生生物などの関係を具体的に知ることができる。
結果、自然の営みやその神秘性のほか、何千年もかけてつくられた地理的自然環境の地域性を知ることになり、「触れる」ことの意味を更新することとなった。

姫路市環境政策課の計らいで専門家の方々のご紹介を得て実現した。

左写真

「きのこコース」の参加生徒。
説明を聞きながらメモを取る生徒も。

2. 学んだことポスターセッション

二日間で学んだことを共有して発表内容をまとめる



別冊報告書 18頁

左写真

自分の学びを伝えている中国生徒。それを通訳している大学生(府立住吉高校出身)

発表内容をポスターに表現していく。



ポスター発表の様子




■ 発表の特徴：人と人、人と自然、人と社会の関係において、人が人を大切にし、人が自然を大切にする、そして人が社会を大切にすることができれば、持続可能性をもった社会が生まれる、という内容の発表が多くなされた。それは（技術的なことや、計測可能な個々の能力の問題、あるいは自分の序列化ではなく）主体的にどのように生きるかというような、上記の3つの関係を統合する「善さ」の価値を生み出す意欲を鼓舞する内容であった。例えば、次の振返りは、人と人、人と社会の関係においてそれを生み出した内容が記されている。「私は、最初は怖いと思っていましたが、友達が『大丈夫』っと目で教えてくれたのでその日からとても楽しいユネスコになりました♡。ユネスコ(ESD)を通してこれからも頑張ります。先生、みなさん、バスの運転手さん、二日間有難うございました。」(小学生)

3. 閉会式



左写真
各ファミリーで発表したことをまとめて模造紙に書いている。

左写真2枚
ポスター発表風景

| | | |
|---|--|--|
| | <p>■ 教員振り返りより（抜粋）</p> <p>・他校との交流によって、生徒が普段の学校生活では見せない一面を見せたり、普段口にしらないような意見を言ったりしました。交流の機会や異文化と触れることの大切さを再認識しました。</p> <p>・私の予想よりも子供たちは積極的に動いていました。生徒たちは能動的に動くことが苦手だと思っていたので驚きました。（女性）</p> <p>・生徒の内心は学ぶ意欲が多くあり、それをうまく引き出せば短い時間でもよい学びになることが改めて実感した。学校に持ち帰り共有したいと思う。（男性）</p> <p>・一、ESD について私たちの学校がどのように実践しているか、何をやっているかよく考えていますが、今回日本の学校のプレゼンを見たら、明確な課題を自分で考えて実践した中身がある活動が良く分かりました。これは我々は勉強すべきところです。二、自然観察のワークに参加して、専門家が小学生たちを植物に興味を引くために様々な活動とゲームを用意していることが分かりました。三、今回、日本の ESD 実践をめぐってこんなに多くの学校と生徒と教師たち、地域の方とボランティアなど熱心に参加しています。みんなで力を尽くして連続的に一つのこと（ESD）を続けることにたいへん感心しました。（中国・女性）</p> <p>・ほとんどの参加者が主体的に取り組んでいた様子が大変印象的でした。また、言葉の壁はあったものの中国の学生さん、先生方との交流がとても新鮮で知見を深めることができました。（男性）</p> | |
| <p>2019 年 11 月 4 日（月祝） フォローアップ セミナー</p> <p>会場：大阪府立住吉 高等学校（北畠会 館）</p> <p>※10 月開催予定のフ ォローアップセミナ ーは台風接近のため 中止となった。</p> | <p>フォローアップセミナーは次の内容で開催された。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 準備セミナー・姫路ワークショップの振り返り 2. 何を学んだか。 3. 私たちにできることを考える 4. 「ESD 宣言 2019」をだそう。 <p>1. 準備セミナー／姫路ワークショップの振り返り</p>  <p>■ フォローアップセミナーは、8 月に実施された姫路学 びあい交流会以後 2 か月半を経過して開催された。参加 生徒たちは、11 月連休のクラブの試合や文化祭等の学校 行事にかち合った学校を除いて集まってきた。</p> | |

2. 何を学んだか。

3. 私たちにできることを考える

- 今回の事業を一過性の行事とすることなく、経験と学びの連続性を図り、その内容の内面化を図るために2か月半の時間を経てから改めて「学び」を問うた。また、今自分が取り組んでいることや、持続可能性をつくる当事者として実施していることをまとめた。



4. 「ESD 宣言 2019」を考える

- 宣言文は以下の考察手順で考えられた。
 - ① 持続可能性を阻害（じゃまする）する問題。
 - ② その問題はどのような考え方から問題だと思うか。なぜそのように思うか。※優先すべき価値や考えの比較と両立
 - ③ では、その問題を引き起こさない（これ以上悪化させない）ために具体的にどのような態度や行動が必要か。
- ①②③でまとめられた内容をさらに代表生徒がまとめる作業を行った。



〈ESD の考察〉

①事実の見方。

Critical Thinking
(問い直す力)

②持続可能性にとっての価値（公平・公正・平等・尊厳・尊重・発展性・可能性／あらゆる生命・安全・安心等）との接合性

③一般論や評論家的な指摘ではなく、問題や問題解決当事者としての自らのあり方

写真は生徒代表が宣言文を考えている風景

- この「ESD 宣言文 2019」の制作は、富山国際大学附属高等学校、奈良教育大学附属中学校、姫路市立安富北小学校、中国人民大学附属中学にも宣言文の案が送付された。（中国には事前に宣言文の案について提案を出していただいた）その後、各校からの意見と提案が調整され、最終的に全参加校によって承認されて宣言文が完成した。

別冊報告書 29 頁

2019年11月4日
～15日

宣言文作成と共有

- 参加国校の学校での振り返り（フォローアップ）が行われた。⇒ 富山国際大学附属高等学校で報告会開催／大阪教育大学附属高校池田校舎／姫路市立安富北小学校ほか、各校でポスター貼付／報告会／振り返りのフォローアップが開催された。（未確認学校あり）
- 中国人民大学附属中学校（小中高校）でのフォローアップの風景



中国生徒のまとめ作業(9月4日)



中国からの参加生徒による掲示用報告ポスター



中国からの参加生徒によって、「学びあい交流会」の一部が全校集会で報告された（10月）

2019年
11月24日（日）
事業のまとめ会議

- ユネスコスクール全国大会（福山市立大学）での報告発表内容のまとめ作業を行った。
会場：大阪教育大学附属高等学校池田校舎


2019年
11月30日（土）
「ユネスコスクール全国大会」においてポスター成果発表

- 2019年度ユネスコスクール全国大会(福山市立大学)において成果発表、およびネットワーク構築・深化の今後の展開の発表を行った。



左写真
ポスター展示を行った会場風景

- ①左端
実施内容と展開
- ②中央
児童生徒のESD宣言
- ③右端
活動の写真風景

| | | |
|---|---|---|
| |  <p>■ 全国大会参加者からは、私たちがこのようなプログラムをしてみたい、という声も聞こえた。</p> <p>■ テーブルにおいた ESD 宣言文 (100 枚) ちらし 30 枚は全て持ち帰られた。</p> | <p>左写真 展示ポスターを読み込む参加者</p> <p>別冊報告書 17,18,29 頁</p> |
| <p>2019 年 12 月 14 日 (土) 2020 年 2 月 9 日 (日) ネットワーク将来検討会議・評価会</p> <p>会場： 大阪府立大学／大阪教育大学附属高校池田校舎</p> | <p>2019 年度事業について以下の報告がなされた。</p> <p>■参加者総数 のべ 583 名 <1 回あたり 平均 117 名> (内訳は以下の通り)</p> <p>第 1 回準備セミナー <u>123 名</u> (教員・児童生徒) 第 2 回準備セミナー <u>99 名</u> (教員・児童生徒) 第 3 回準備セミナー <u>90 名</u> (教員・児童生徒) 学びあい交流会 <u>169 名</u> (教員・生徒・学生・通訳・見学含む実数) ※宿泊児童生徒 <u>125 名</u>(児童生徒のみ) フォローアップセミナー <u>102 名</u> (中国・安富北等含む) 全 5 回の内、1 回以上の参加した人の数 <u>214 名</u></p> <p>■参加校数 30 校 (教員のみ・セミナーのみ参加含む) 海外参加(中国 2 校扱い)小学校 1 校・中等学校 1 校 国内参加 29 校 小学校 4 校 中学校 4 校 高校 21 校</p> <p>■児童生徒の ESD/SDGs に関する「学びの内容(質)」が報告された (この時点では未資料化データ)。これによると、本プログラムを経た児童生徒への影響内容をまとめると以下の様になる。</p> <p><高い割合順> 「考え方、価値」の影響が 89%、 「自分の振る舞い・行動・態度」への影響が 87%、 「自分の他人へのかかわり方」81% (持続可能性の)「知識的なこと」の広がり 69% 「自分と社会の関係(つながり)を見る力」59% 「自分と自然の関係(つながり)を見る力」50% 「自分の可能性」が広がった生徒が 33% (複数回答可・回答者数は全体の 60%)</p> <p>■振り返り記述内容からおおよそ次のような結論を得ることができると思慮される。</p> <p>ESD・SDGs は児童生徒自らの向上心や成長と共に、その知と精神が学びとして備わっていく必要がある。本来、ESD は大人が学校で備えさせる「能力」というような評価を前提とした扱いではなく、自らが生きていく上で抱く希望や自分への期待を持つことができる幸福追求の一環として捉えられなければ主体的な持続可能社会の創造の当事者とはなり得ない。このように考える時、自分と他者との関係性や、自らが社会の公正な一員でなければならないことその他、逆に他者や社会での自らの役割などの意識化が幸福追求(成長意欲)の一端に備</p> | <p>参加校・参加者数 別冊報告書 48 頁</p> <p>別冊報告書 19 頁 ～28 頁</p> <p>回収率： 台風のため当初予定されていた振り返りの日程が延期され、安富北小での活動から 2 か月余り経った 11 月 4 日ようやく会場を借りることができた。このため学校行事や公式戦などで都合が合わなかった多くの生徒が参加できなかった。</p> |

えられるべきことに気づかされる。まさに ESD リーダーとしての役割は、人と人、人と社会、人と自然との関係において上記の通り自らを問い続ける姿 (critical thinking) と、多様・多元的価値と諸相が混在する中であってそれらが配慮しあう姿を自らが描くところに真価があるのではないだろうか。今回のアンケート (準備セミナーの振り返り含む) からは、自分が人や社会・自然と関わろうとする意欲や自信、社会や自然を見る力、持続可能なあり方を意識した言葉・振る舞いや自らへの期待などの確かな内心の変化を読み取ることができた。私たちは、改めて持続可能社会の発展が、一人ひとりの成長意欲や希望が育つことと同期していることを理解する必要がある。

■ 今後のネットワーク活動について、以下のディスカッションが行われた。

ネットワークを通じた学びの重要性は、以前から大きな「成果」が確認されてきたところであった。例えば、現在、ネットワーク活動を通じて UNESCO ASPnet の活動や ESD を実践することを志した教員は多数に上る。そして、大阪・関西地域ではこのような背景をもった新たな教員が毎年着任し続け、その第2世代によってネットワークが支えられ始めている。このようなネットワークの歴史的成果をさらに発展させ、北陸地域・近畿地域のブロック単位の学びあいを継続的に実施することは、たちまち「学校」という単位での ESD の理念を「社会」の各産業場面における面的広がりをもった ESD へと結合させることができる。以上から、北陸・近畿ブロックの ASPnet の活動を面的に充実させるために、新たなネットワーク活動を展開させることが提案された。

■ ASPnet の活動のあり方そのものについてディスカッションが行われた。

重要であることは、主人公は誰なのか、ということであった。まず、ASPnet 加盟校が、「加盟してよかった・・・」と思えるネットワーク活動が用意されなくてはならないこと。次にネットワークに加盟して、「学校単独では学べないことを学べた・・・」という実感が伴うものでなくてはならない。

次に、運営については、多くの学校が集まり、かつ学校種が異なる場合の運営は難しいと思われるが、それぞれが自分の学校の視点だけで「都合」を主張するような風潮や、一つの職員組織で行う学校行事の感覚で段取りを考えていては、ネットワーク運営はうまくいかない。むしろ、どのような協力ができるか、どのようなネットワークへの貢献ができるか、を各学校や教員が知恵を出し合うことで、上記の目的を達することになる。まさにこれが ASPnet であり ESD であるのではないか。以上

今後に向けて①

今後に向けて②